

小グループ・ 神からの組織形態

弟子化・リーダー育成・
伝道進展の可能性の熱い夢について

我妻清三

小グループ・神からの組織形態

弟子化・リーダー育成・伝道進展の可能性の熱い夢について

我妻清三

目次

序論

3

第一部 従来の旗振りからの反省点（課題・問題点）

3

- 一、「プロジェクトX」的な取り組みが必要ではないか
- 二、キリストの弟子化が組織的・継続的ではなかった
- 三、指導者養成は？
- 四、牧師や信徒の役割に関する神学の再構築が必要
- 五、派遣不在の現実
- 六、牧師以外は聖書研究をしてはいけないような風潮が特に大教会にはありませんか？ 羊飼いでなく羊こそが羊を産むのです！
- 七、日本における聖書研究や講演の主題選びの留意点！

第二部 小グループ伝道理念

10

- 一、小グループは聖書的あり方の一つである
 1. それは神の御性質（三位一体性）に由来
 - ① 神形（しんぎよう）計画
 - ② 神の家族の再編成
 - ③ 「愛し、愛される品性」形成
 - ④ 信徒同士による共同牧会の必要
2. エテロ方式
3. 初代教会の教会形成は大部分「家の教会」的
4. 主は弟子たちを神の家族的関係の小グループで訓練
- 二、小グループ伝道に対するエレン・G・ホワイトの勧め
- 三、小グループの為し得ること
 1. 信仰者の存在意義の確認
 2. 宗教を生活の場に取り込む実験
 3. 親密な信仰の友を得る
 4. 知・徳・体のホーリスティックな成長を得る
 5. 信徒による指導が可能

6. 比較的柔軟な対応が許され得る関係
7. 伝道の最前基地

四、近代においても成功している伝道方法である

1. ジョン・ウエスレーの「クラス」方式
2. 純福音教会の「ホーム・セル」方式
3. SDA木更津キリスト教会や三育学院教会

第三部 小グループ伝道の実施に向けて

17

- 一、安息日学校のガイド研究時間を活性化する
 1. 教師と司会者の育成
 2. 演繹法と帰納法
3. 安息日学校生徒の能力をも動員し、生かす集いに
4. 教師と司会者の数と司会者技術について
5. 「聖霊」を究極的な教師として信じ仰ぐ

二、「小グループ伝道所」を教会内外至る所に設立する

1. 小グループ（神の家族的関係）形成
 - ① 目標、それは愛の関係回復、愛の交わりです
 - a. 愛の交わりを深める
 - b. 教理よりも温かい交わりを必要と感じている人々が多い
 - c. 七名以上の友人が必要
 - d. 教会内での奉仕の機会が与えられることが大事です
- ② サイズ、それは十二人以下の小グループ
 - a. 二、十二人での気の合う仲間作りをする
 - b. メンバー全員が参画・発言しやすい人数
 - c. 多くなったら暖簾（のれん）分けをする
- ③ 集会の場所、それは快適に集える場であること
 - a. 交通が便利で快適な場所
 - b. 教会・家庭・職場・公共の建物等
 - c. リーダーの家がベスト
2. 定期集会
 - ① 集会の回数と長さ

② 座席の配置
3. 集会の内容の五つの要素

- ① 祈り
- ② 学び
- ③ 働き
- ④ 賛美
- ⑤ 礼拝
4. 小グループを健全にする八つの側面
 - ① イエス・キリストを中心に
気持ちを大切に
 - ② 了解事項を互いに尊重
 - ③ 献身的
 - ④ あくまでも優しく思いやり深く
 - ⑤ 聖書の学びを土台に
 - ⑥ 「イエスの証」に信頼して
 - ⑦ 対話を重視
 - ⑧

三. 小グループ・リーダーのリクルート

1. リーダーのリクルート
 - ① 祈って招く
 - ② ティーチャブルな人
 - ③ お世話役でもある
 - ④ 「チボコゴリ」な人を
2. 次のリーダー養成が必須
3. コーチ役が必要
4. 「教師」と共に「司会者」的リーダーを動員する

四. 小グループ・リーダーの育成とその実施

1. 教会は伝道訓練のセンターとなるべきです
2. 弟子化もリーダー育成も組織的に
 - ① 暇（？）があつて、やる気のある人
 - ② 選び・育て・派遣し・選び・育て・派遣のサイクル
3. 「十人隊長」的小グループ・リーダーを育成し、動員
 - ① 二千数百名の小グループ・リーダーの育成と動員

② リーダー・副リーダー・副々リーダーを選び育てる

4. 訓練の実施計画
 - ① 日毎・週毎・月毎・期毎・年毎・随時の教育計画
 - ② 三育学院カレッジの「信徒大学講座」の受講
 - ③ 「不忘山麓聖書塾」(FBI)で受講
 - ④ インターネットや通信講座を用いて
5. 訓練育成期間は最小単位一年半、そして三〜七年
6. 「司会者技術指導員」育成講習会を二〜三年継続
7. 小グループ・リーダーの支援体制として、「主事」や「コーチ」役の人材を育成し各教会に置くよう図る

五. 三段階カリキュラム案

1. 初級
2. 中級
3. 上級
4. オプション

六. 如何に小グループ活動を開始するか

1. 準備
 - ① 祈り
 - ② 型にはめないように
 - ③ 他者からも学ぶ姿勢で
2. 交渉開始
 - ① 既存のグループはどうするか
 - ② 喧伝・知らせる
 - ③ 接点を持つ
3. 会合開始
 - ① できるだけ早急に
 - ② 自発を旨とする
 - ③ キリストにある成長・変革を願う集い
4. 目標設定
 - ① 小グループ形成目標
 - a. 理由確認
 - b. 短期・長期目標の確認

c. 構成人員・将来の暖簾分け等の確認
他の小グループ活動との連携

- ③ 時間・場所・内容等の要求事項の確認
5. 前進
 - ① 「二人の魂は全世界より重い」
 - ② 主の働きであることを覚えて前進

結語

付録

- 一. 広島北信徒指導者養成学校カリキュラム
- 二. 司会者技術十ヶ条
- 三. 小グループ伝道委員会報告から

序論

まず、何故、今、小グループ伝道なのでしょう？ それは、神の意図された麗しい人間関係の回復運動だからです。

至る所で家族関係が崩壊している終末時代において、主を中心にした、真実で親密な、主が愛されたように互いに愛し合う人間関係、そして神の家族関係の構築を求める一大運動が、上より指示され、意図されているのです。

「その時、主を畏れ敬う者たちが互いに語り合った」（マラキ三の十六、強調は著者挿入）と、終末時代の神の民の姿、「宝の民」の姿が預言的に描かれております。上との縦の関係だけではなく、横の人間関係のことも「互いに語り合う」関係として印象深く預言書は描いております。人々が、

「神に仕えることはむなししい。

たとえ、その戒めを守っても

万軍の主の御前を

喪に服している人のように歩いても

何の益があろうか。

むしろ、我々は高慢な者を幸いと呼ぼう。

彼らは悪事を行っても栄え

神を試みても罰を免れているからだ」（十四、十五）

と言っている時代に、救われる神の民たちは、「互いに語り合っている」姿があり、主は、彼らの言葉に「耳を傾けて聞いておられる」というお姿が描かれております。主を中心とした、互いに語り合える、親密な家族的交わりの姿こそが、終末時代の神の民のありようであることをこの預言書は示唆しているように思います。

一方、現代の主のメッセンジャーであるエレン・G・ホワイトは、「わたしは、誤ることのないお方から、クリスチャンの働きの基礎として小さな組を組織するように示された」（『教会への証』第七巻、二二二頁）と、言っております。親密な家族関係的な小グループ形成に関する強いメッセージです。

どの社会も家族から成り、その家族関係が磐石であれば、その社会は安定しておりますし、繁栄します。家族関係が崩壊すれば、単にその家族だけではなく、それを構成メンバーとしている社会が病みます。同様に神の家族単位である小グループが健全であれば、その教会は、たとえ大教会であっても麗しい関係の集積の中で磐石であり、安定と繁栄とを楽しめます。

これまでも、我が教団において、小グループ伝道の試みは、幾度か為されて来ましたが、どちらかと言えば挫折の思いが多数を占めている現状ではないかと思えます。

そこで、まず最初に第一部として、従来の小グループ伝道の旗振りでの問題点・反省点に考察を加えてみたいと思えます。それから、第二部として、小グループ伝道の基本的理念を取り上げ、第三部では、その実践に関する具体的諸相を考え、併せ今後の伝道への提言も試みてみたいと思えます。

第一部 従来の旗振りからの反省点（課題・問題点）

小グループ伝道は今日まで、いろいろな形で試みられては来ましたが、全体として、挫折感があっても成功している実感はないのが、殆どどの現実かと思われます。にもかかわらず、一方では著しい成功を

収めている事例も確かに存在しております。一体何故にこの違いが生じているのか、当面している問題点と考えられる事柄を七つだけ取り上げ、成功しているケースと同様の成果を見る伝道への足がかりとなるものを得ることができたらと思います。SDA日本伝道の飛躍の足がかりをです。

「プロジェクトX」的な取り組みが必要ではないか

うまく行かなかった時、何故そうなのかの検証と、その上に立つてもう一度も二度も、成功を目指して新たに試みてみるといった努力が、致命的に欠落していたとは言えないでしょうか。すなわち、目標・計画・実行・反省、そしてフィードバック・再施行のサイクルを、目標達成まで忍耐強く何度でも努力し続ける必要があります。何故なら、主が現代の私たちの働きとして勧めておられるプロジェクトだからです。

食傷気味等とは決して言わずに、成功を見るまで努力し続ける「プロジェクトX」的な取り組みが何としても必要です。

二、キリストの弟子化が組織的・継続的ではなかった

群衆の中の孤独という言葉もあります。家族関係や人関係等が互いにありませんと、そこにどれだけ人がおりましても、人は孤独です。そして、関係の欠落した人間は、むしろ元来不自然であり異常です。人は本性的に、親密な人間関係を必要としている存在なのですよ。

教会が大きくなって行きますと、教会の大会衆の中にあつて孤独をかこつ人が必ず出てきます。それは、未だ克服されていない何か性格

の問題があるのか、自分の問題だけに沈潜している状況とか、種々の理由があるでしょう。しかし、成熟した人物と共に、いろいろな意味で未成熟であるキリスト者や求道者が、正常で活動的な生きた教会には多数集って来ております。

このような人たちの家族的ケアは牧師一人では限界があります。両親二人で二三人の子供を育てるのに苦闘している現実を直視すれば一目瞭然なのですが、一人の人間が世話できる人数や事柄には限界があり、共同の助け合いが必要なことは論を待ちません。

親子関係だけではなく兄弟姉妹同士の世話し合いも家庭にはありますように、牧師によるだけではなく教会員同士の世話し合い、すなわち信徒を巻き込んだ「共同牧会」が当然必要になってきます。キリストはそれを御自分の弟子たちに願って、「互いに愛し合いなさい」(ヨハネ十五の十七)と命じておられたのです。

ところが、信徒のこの共同牧会を可能にする成長、弟子化、すなわち成熟したキリスト者づくりが、組織的には教会の中で図られて来てはおりません。洗礼を受けて新たに教会内で誕生しても、放置されたままです。牧師の転勤直前に受洗した新しい信徒等は殆んどがそのままになる場合が多いし、教育計画が殆んどないのが現状です。安息日学校等はその役割を期待されているわけですが、個々人の発達状況に合わせた教育プログラムという視点一つを取り上げてみしても、現況では不十分です。

発達心理学という学問がありますが、子供たちは、その成長の各段階において固有の必要があり、即応した教育プログラムが与えられることによって、人は何年か掛けて、大人として成熟していくのであることを、提示しております。それは生涯教育でのマスタープランが問われております。韓国SDAの信徒伝道者養成学校や再臨祈禱院、ま

た米国の北米支部信徒伝道者養成学校（NADEE）等は、信徒教育に
 的を絞った生涯教育のマスタープランの中から生まれた機関の一つで
 す。三育の諸段階の教育機関もその役割を期待されておりますが、そ
 れに与かれない信徒もたくさんおります。

訓練を受ける機会もなく、家族的組織形態も確立されていない状況
 下では、具体的な問題が生じますと、当然家族関係的な慰めや励まし
 を得ることはできず、また自分一人では処理しきれずに、寂しく教会
 を去る現実が生じてきます。主の弟子としての成熟が図られておらず、
 またしつかりとした家族的な友愛関係が構築されていない場合がそう
 なりやすいのは当然です。

「親業」的な、教会員の人間としての成熟を目指しての組織的な教
 育プログラムが必須です。洗礼を受ける前からも、そして受けてから
 も、一人の成熟した人間・クリスチャンとして成長するまで、そして
 自分で霊的子供たちを産み、そしてこれを育てて行けるようになるま
 での組織的教育プログラムが必要です。その一つの試みが、後程詳述
 する小グループ形態での信徒育成プログラムなのです。

三、指導者養成は？

教会内には様々な役割を担う人材が必要です。牧師、長老、執事、
 また書記や会計やその他の諸役員等。更には、教師や小グループ・
 リーダーやそのコーチ陣等。

今日まで、それなりの指導者や後継者育成は図られて来ております
 が、現在の必要性に応え得る教育プログラムは極めて不十分であると
 は言えないでしょうか？ 行き当たりばつたりの場当たりの、成り行
 き任せの現状と言えないでしょうか？ なる程、牧師教育は三育学院

である程度は果たしているかのようですが、これとて、現今の日本の
 ような高学歴社会下では、少なくとも修士号位は取得している必要が
 あると考えられますし、一教会一牧師の組織形態を維持しようとする
 のであれば、牧師はその分野での最高の学びを修めた博士号取得者で
 あることも当然信徒側から期待されてしかるべきなわけです。信徒伝
 道者にも高度の訓練を提供する必要があるのですが、年に一回だけの
 役員講習会や「使徒運動二十一」程度のプログラムで、本当に救霊の
 実践力としての人材は育つのでしょうか？ そして、育ったのでしょ
 うか？ 無駄にお金を浪費していただけない位です。お茶を濁すとい
 う言葉がありますが、それに等しいのではないのでしょうか？ もつ
 と真剣に、人材育成・人づくりというトップ・プライオリティーを
 しつかりと考えて、これに励まねばならないと思います。

「どの働き人も思慮深く有能でなければならぬ。その時、高く広
 い意味において、彼はイエスにある真理を示すことができる」（『教会
 への証』第七巻・七〇頁）。知的・霊的・技量的ハイレベルが期待される
 べきですし、この実現を優先順位第一に据えた、人材育成の具体的な
 取組みが必要です。

もし賢く運用されてゆけば、この人づくりの一端が、神の家族関係
 的小グループ伝道活動の中では、ある程度可能となると期待してい
 るし、期待されているのです。

組織として、教会員育成に必ずしも成功してはおりませんので、
 「自然に成長する教会」の中でも指摘されている権威分与的リーダー
 シップができておりません。特に、中南米や東南アジアの信徒たちと
 比し、我が国では、優秀な多数の信徒が動員されているとはとても言
 える状況ではなく、拘束されております。解放されるべきです。与え
 られるべき組織的訓練も付与されることなく、彼らにふさわしい宣教

の場も働きも提供されることなく、ただいたずらに、ミッションナリーのかばん持ちに汲々としていた長い歴史の後遺症を今も見ると思えます。例えば、日本のような土壌では、世界総会にある部局と同じ部局が生き生きと活動していなければならないのに、北米大陸の事情によって統合された「活動部局」をそのまま受け入れ、日本伝道の活力を失わせた経緯等も考慮すべきです。日本は事情を説明し、断固として、各部局を残すべきでありました。

ミッション時代の宣教師支配下の考えを色濃く残す、一教会一牧師の教会行政下で、教会員は見物席に座らされていて、ある場合には働こうとする人も多数、白眼視されたり阻止されたりして縛られている現実がありました。自給伝道の牧師が容認されず、教団から給料を得る形でないと牧師にならない等、伝統的形が優先した姿も多く見えました。これが現状ではなかったのでしょうか？ ある地域（南米支部）では、信徒による洗足・聖餐式はおろか、洗礼さえも許されているのです（『ミニストリー』二〇〇八年十月号・五〜八頁参照）。

四、牧師や信徒の役割に関する神学の再構築が必要です

牧師の役割は何でしょうか？ 信徒を世話することですか？ 確かにそれはその一つです。しかし、この信徒を世話するという一つの役割として、どのように世話をするのかについて、一般的に言って、その理解に誤解があるようです。

丁度家庭で、子供たちが大人になって自立して行けるように親が子供たちを助け育てるのに似ている役割であると思います。親を超えた技量を身につける程までに成長し、親を超えた働きを為すに至る時、親は赤飯を炊いて喜び祝うのです。同様に、教会員が牧師を超えた伝

道者、聖書研究者、祈りの人、説教者、牧会者、救霊者となっていくように助け育てる役割が、牧師にはあるのです。その成長の為、神の働きを為せるように助け、彼らに働きを教え、与え、そして、牧師ではなく神に頼って生きられるように導く役割です。信徒の存在が、地の塩となり、世の光たり得るように助け育てる役割です。牧師が一人、歌い踊り語り祈り訪問し、信徒はその有能振りを見物席で見させている教会は、神の方法ではありません。

例えば、説教は、なる程、牧師があだ疎かにすべき事柄ではありませんが、牧師の働きの中心は説教ではありません。信徒が牧師を超えた説教者となり、聖書研究者となり、祈りの人、訪問伝道のできる人々を世話できる人として成熟してゆくように訓練できてこそ、牧師の働きを真に全うしたと言える世界なのです。エレン・G・ホワイトは、「神はその働き人たちに、ご自身の教会を正す働きには任じてはおられない。この働きが為されるようになると、繰り返しそれが為されねばならなくなる。このように世話をされ、世話を受けている教会員は、宗教上だんだん弱くなっていく」（『教会への証』第七巻、十八頁）と言っております。

自分一人が働き、信徒はかばん持ちか見物人に過ぎない立場に置くような働きは、神がその働き人たちに与えられた働きではありません。彼らに託された信徒たちが神に依存し、神の御手の内にあって働きにつくように助け育てることが、牧師たちや働き人たちの役割です。牧師たちの働きの強調点のシフト、パラダイム・シフトが願われております。

このようにして、教会の中に、信徒リーダーたちも多数育てられてゆかねばならないのです。

全信徒の十五パーセントは小グループ・リーダー足り得ると言われて

おります。日本のSDAで言えば、二千二百名にのぼります。牧師百名で働くのではなく、二千数百名の方々を励まし助け育て、彼らを動員して、このような人々と共に「共同牧会」をするのです。その教育プログラムとしっかりしたカリキュラム作りが必須です。この働きは教団伝道局や牧師会の専権事でもあります。リーダーが変わり、時が変わっても、軸ぶれしない、変わらないプログラム作成が是非必要です。

五、派遣不在の現実

多くの場合、目の前の課せられた仕事に追われ押しつぶされて、救霊に関わる、福音宣教という第一優先たるべき使命が埋没してしまっている現実はありませんか？ 何か仕事はしているのですが、ただ事務的なことや行事だけをこなしているだけ、また世界総会や教団・教区といった上部機関から来る行事だけに忙しく携わっているだけで終わる。誰か新しい人に福音を語ることが一つもなく今日も一日が過ぎ行く毎日。福音宣教に派遣されていない現実。こうしたことが当たり前になっていっている現実はないでしょうか？

我が教会は長い間、一教会一牧師の体制の中で、誤った考えの中で、徐々に教会員の伝道精神の芽がつまれてしまつて、牧会や伝道は牧師が為すべきこと、との風潮が一般的になって今日に至っております。

次から次へと反省も新工夫もしかるべき教育の機会も与えられないままに打ち出されてくる上部機関からのキャンペーンに振り回され、時流に押し流されるままで、どのようにしてこの暗い穴から抜け出せるかの明快なビジョンの構築の暇も与えられずに、ただ目の前の仕事をこなすだけでも精一杯の行政担当者たちの激務の現実。兼任兼任の激務の現実。祈りの内に考えてみましょう。どんなに優秀な人物でも

無理は百も承知の能力を超えているように見える過密な役割の現実。

かつてあったMV（ミッシヨナリー・ボランティア）精神も、『光を掲げる者』としての精神も、『キリストの証人となる』の精神も、『三天使の使命』の精神すらも、これらの用語も含め、今は殆んど懐かしい思い出となってしまう位に消えてしまつて久しいのです。どこからそして、どのようにしてこの現実を迎えるようになってしまったのでしょうか？

一つの大きな原因は、ここでも、持続的・継続的な教会員教育が組織的に為されてこなかった点を挙げることができそうです。「どうして始めるかを教えられさえすれば多くの人は喜んで働く。彼らには教えと励ましが必要である。すべての教会がクリスチャンの働き人を養成する学校でなければならない」（『ミストリー・オブ・ヒーリング』二二頁。強調は著者挿入）。

牧師依存型の教会体制の中で、牧師自身がその使命を見失っていることも最大原因と思います。繰り返しますが、教会員を育成する使命をではなく、教会員を見物席に座らせて、牧師たちの一人舞台を見させることで満足している形。教会員を舞台に立たせることを殆んど意図しない形。神にはなく自分に頼らせ、したがって彼らを派遣できないし、していない形。神に信頼させて派遣するようにはしていない形。派遣しないどころか、派遣してくださいと願っている優秀な信徒を逆に阻もうとさえする現実。このような誤謬をこそが打開・打破されるべきなのです。

六、牧師以外は聖書研究をしてはいけないような風潮が特に大教会に

はありませんか？ 羊飼いでなく羊こそが羊を産むのです！

確かに比較的言って、大きな教会には、人物識見^{じんぶつしけん}共に非常に高いレベルでその能力を備えている牧師が遣わされて来た傾向があり、そのような先生を置いて自分如きが聖書研究や訪問、或は説教等とはとんでもないし、またそうしようとする人々があればその人々を無定見な人たちと見る向きはあったし、現実であったのです。忠実で真面目で熱心な信徒はしばしばこのような考えを持っていて、牧師先生を置いて差し出がましい生き方をしてはならないとの古い伝統的な美学に歩んでおります。

しかし使徒ヨハネは、主が捕縛される直前の遺言的メッセージの中で、来るべき真の教師は使徒たちでも牧師でもなく、聖霊であると、主御自身次のように言われたことを記録しております。

「言っておきたいことは、まだたくさんあるが、今、あなたがたには理解できない。しかし、その方、すなわち、真理の霊が来ると、あなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる」（ヨハネ十六の十二、十三。同十四の二五、二六参照）と。

同じ使徒ヨハネは、一般信徒宛に書いた手紙の中で、

「以上、あなたがたを惑わせよとしている者たちについて書いてきました。しかし、いつもあなたがたの内には、御子から注がれた油がありますから、だれからも教える必要がありません。この油が万事について教えます。それは真実であって、偽りではありません。だから、教えられたとおり、御子の内にとどまりなさい」（第一ヨハネ二の二六、二七）と、聖霊の教師性を強調しております。

使徒パウロもコリントの教会員たちに、「主の霊のあるところに自由があります」（第二コリント三の十七）と言っております。

主の霊のお働きを考慮する時、牧師を含む教会のリーダーたちは、

もつともつと一般教会員・信徒たちの主の霊の下にある可能性を考え、その自由度を認める必要があります。主にある有能な信徒たちを、もつと柔軟性をもつて育て、遣わすべきではないかと考える場面も多々見えてきました。

第一次伝道旅行時にパウロたちは、「教会ごとに長老たちを任命し、断食して祈り、彼らをその信ずる主に任せた」（使徒言行録十四の二三）とあります。わたしたちは、どれ程主に信頼し、その信徒たちを信頼すべきでありましょうか？ ある場所ではほんの数日の滞在です！

確かに今の時代、日本のような非キリスト教国における、キリスト教の背景のない人々の多くは、単純に使徒時代下で長老に任じられた人々のようにユダヤ教的な霊的訓練を受け続けていたであろう人々とは、比べることは無謀とは思いますが、しかし主の御霊の御力とは変わりませんし、主に教えられ導かれている者たちの持つ可能性という原理は、エレン・G・ホワイトの例でも見られるように、今日とて同じです。下手をすると、指導者と自認している人々は、いたずらに抑制することにより、「他人（主）の召し使いを裁くとは、いったいあなたは何者ですか」と詰問されることになるかもしれないのです（ローマ十四の四参照）。

もう少し、謙虚に、主にある、導かれて教会に属する者となられた人々を、信頼する必要があるのではないかと考えます。「羊を産むのは羊飼いでなく羊である」との名言を語られた一信徒伝道者のことも思い起こします。伝道は主の羊を通してこそ豊かに為され得るのです。

日本のSDAの中に現在いらっしゃる少なくとも二千二百名余の有能な信徒リーダーたちを解放し、動員し、集会所や聖書研究会を開かせ、聖書研究でも、訪問伝道でも、その他何でも、彼らの指導の下、主のお働きをしていたくように図ることが今日の肝要事でありま

七、日本における聖書研究や講演の主題選びの留意点

キリスト教の世界観・人生観は、大部分の日本人にとりましては、驚く程に完全に異質なものです。幼い時から植えつけられている、特に「日本的な神概念」は、聖書の教えるそれとは全く異なります。したがって、単なる理論や教理的教えだけでは、聖書の神、すなわち創造神を理解するのは、極めて困難な事柄の一つなのです。

愛の神、それは到底考え得ない、まさに絵空事のような異次元の概念です。同じ言葉を使っている、その概念が全く異なる形で感じ取られているのです。

ですから、教理的に納得しているつもりではあっても、愛の人としてのキリスト者的変化は起こりません。愛は愛によって生まれると言われておりますように、神の愛を知らない人にとりましては、どんなに知的に言語や事物に通曉するようになりましても、また、ダニエル書や黙示録の示す終末の諸事件に関する事柄を図表化できる程によく判り得ているとしても、愛し、愛される関係の生活となる回心も新生も程遠いのです。

御霊の働きによって、キリストの愛を知り、そして神の愛を知るに至って、はじめて人は新生を経験することとなるのです。

そうした背景を考えてみますに、キリスト教文化をバックにしている欧米の提案する伝道方法をそのまま日本に移入することは、当然その有効性にある意味で問題があるわけです。講演会や聖書研究会の題目の順序や内容に問題を感じたことがしばしばでありました。もし、本当のキリスト者を作ろうとするなら、そして回心したキリスト者を生み出そうとするなら、自ずとクリスチャン王国の方式とは異なる戦略が取られねばならないことは理の当然であるわけです。

いろいろな窓口、切り口があつていいわけですが、しかし、最終的に

救霊を目指す時には、道であり真理であり命であるキリストを知り、それによって神を知るという単純な方法を踏む必要があるわけです。

「はつきり言っておく。わたしの言葉を聞いて、わたしをお遣わしになった方を信じる者は、永遠の命を得、また、裁かれることなく、死から命へと移っている」（ヨハネ五の二四）とキリストは言われ、また捕縛直前の祈りで、「永遠の命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知ることです。わたしは、行うようにとあなたが与えてくださった業を成し遂げて、地上でああなたの栄光を現しました」（ヨハネ七の三四）とも言われました。

ですから、福音書を中心にし、『各時代の希望』等を参考書としながら、キリストを親しく学び、キリストに浸って知り、神を知る道が救霊の要になります。そして聖書全巻からキリストを学ぶ視点が人を救う最善の道となるのです。

三々五々集まって、聖霊を教師として、二千二百人の信徒リーダーを動員し、「キリストを知る集い」を、日本の至る所に持つこととする伝道戦略が期待されているのです。

以上、七つの課題を取り上げてみましたが、これらは重要ではあっても、確かに完全な問題解決とは必ずしも直結しないかもしれません。しかし、その大部分の課題が、「プロジェクトX」的な努力の中で、小グループ伝道の形態に取り組むなら、容易に解決を見られますし、現時点での日本伝道の夜明けに著しく資することとなると信じています。

第二部 小グループ伝道理念

素敵な家族関係は幸せであり、また楽しいし、有難い関係です。小グループ活動も、親密な神の家族関係で、同様に、それはそれは幸せな関係で楽しい交わりなのですし、またそうでなければ意味がないのです。

家族関係的なグループはいろいろとあり得ます。教会の中だけでも、コース・グループや料理教室的な趣味の会、文伝クラブや奉仕会、また家庭集会や安息日学校クラス、更には教会自体が小グループ的な場合も多く見られます。

序論でも述べましたが、終末時代における神の家族的親密な交わり運動の姿がマラキ書（三の十六）に見られます。グループ・ダイナミックス的な力が終末を生き抜くにおいて相互に必要となっている姿であろうかとも思います。では一体何故、今小グループ的活動なのか、その事由を、もう少し掘り下げ、以下に箇条書きにしていくつか挙げてみたいと思います。

第一にそれは、時が迫っているのです、互いに見張りと言発と支え合いとが一層緊密であることが必要とされているためです。第二に、「三本の矢」とも言われておりますように、一人でよりも仲間での結束した働きが、より大きな働きを可能にするからです。第三に、互いに切磋琢磨することにより、訓練された主の働き人となるためです。第四に、彼我の救霊のためです。一人でいると自分が一体どのような人間であるかを知り得ない場合が多いのです。他者から教えられ、また他者に仕えて生きる交わり生活が成長を促し、また信仰を維持する道でもあります。第五に、偽りの働きを論破し、またそれらから守られるためでもあります。第六に、一人よりも神の御臨在を得やすいためです。二人または三人がわたしの名によって集まるところには、

わたしもその中にあるのである」（マタイ十八の二十）と主が言われましたように。そして第七に、リーダー育成の場として有効であるからです。家庭の後押しで一人の人間があるべき形に育てられてゆきますように、小グループ的の神の家族関係の中で必要な人材が多数育成され、輩出されてゆき易いのです。

このようにして、神の家族関係的小グループと活動は、そのメンバーが日々にキリストの似像（神形^{しんぎよう}）形成へと霊的成長・成熟を遂げてゆくための親密で楽しい交わりの場としての役割を果たすように期待されているのです。

一、小グループは聖書的あり方の一つである

1. それは神の御性質（三位一体性）に由来

聖書によれば、神が人を創造された時、群衆を造られず、男女二人だけ、それも「御自分にかたどって……男と女に創造された」（創世記一の二七）とあります。更に、神は彼らを祝福して、「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ」（同二八）と言われたとありますように、人の中の神の形は、互いに愛し合う男女の夫婦関係の中、そして生まれる子供たちを含めた麗しい家族関係の中にこそ見られるのであることを示唆しております。

① 神形計画（人祖は神の似像として創造されたが、それは、交わりを必要としている男女としてです。それは神の御性質に由来）

人が自分たちの理想像をしばしば人形という形で表現してみるように、神は御自分の姿を写す理想の神形として、人間を創造されたのだと聖書は語っております。人間が神形であるという時、それは三位の神の親密な関係に由来しており、そのような親密な関係をもって人は生きる存在

なのであることを、本来は神によって意図されていたのです。

ですから人は元来、交わりを必要とする存在として創造されました。「人がひとりであるのは良くない。彼のために、ふさわしい助け手を造ろう」(創世記二の十八、口語訳)と神は言われ、家庭を制定されたのです。ですから、人間とは一人では寂しいというより、不自然であるような存在なのです。

人の世にあつて体験する関係の中でも、ペットやその他との関係にも勝った最も親密な関係として、男女の夫婦の関係、また子供を含めた家族関係を定められたのです。

② 神の似像を反映する「家族」の再編成が問われています

佐古純一郎は、人は人と人との間に生きることではじめて人たり得るということを強調して、「人間」を「じんかん」と呼ばせました。温かい人間関係の中でこそ人ははじめて幸せを感じ、また人間として成長を見られる存在なのです。

「じんかん」にあつてこそ幸せであるように人は造られましたのに、そのことがむしろ不幸を生み出す関係となつている場合も今日多く見られ、最も親密であるべき家族関係の崩壊は、とりわけ現代社会の闇の一つです。

確かにこの破れは今に始まつたことではなく、人類の歴史と共に常にあつたのであり、イエス・キリストでさえこの苦衷を深く味わわれました。先妻の子供たちがたくさんいる貧しい家庭の後添えの子として、また私生児として、恥と思われる社会環境の下で、「見るべき姿がなく、威厳もなく、われわれの慕うべき美しさも」(イザヤ五三の二、口語訳)なく、この世に存在されたというイエス・キリスト。

この破れの痛々しい側面を如実に示している事件がありました。母マリヤが異母兄姉たちを伴つて遠路遙々主イエス・キリストを訪ねて

来られた時、主は何と言われましたか? 「わたしの母、わたしの兄弟とは誰か」と答え、周りに座っている人々を見回して言われた。

『見なさい。ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。神の御心を行う人こそ、わたしの兄弟、姉妹、また母なのだ』(マルコ三の三三、三五)と。このように、主イエス・キリストの育たれた家庭も破れており、その真只中に主はおられました。

「神のみ心」に添うていない、この破れている神人関係と人間関係の修復こそが、キリストの願われた人間救済です。そして、神のみ心に生きるというあるべき姿、それは、己を忘れて敵さえも愛する程の愛し、愛される人間関係への回帰なのです。それが神の意図された家族関係の再編成なのです。小グループの仲間作りはそれを再現するのです。

③ 「愛し、愛される品性」形成が問われています

「神は愛」(第一ヨハネ四の八)である時、神の似像とは、その品性が「愛」であるかが問われます。「あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。互いに愛し合うならば、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、皆が知るようになる」(ヨハネ十三の三四、三五)。

伝道者、使徒パウロは言います、「わたしの子供たち、キリストがあなたがたの内に形づくられるまで、わたしは、もう一度あなたがたを産もうと苦しんでいます」(ガラテヤ四の十九)と。

これを実現する為に、キリストは弟子たちを召して、御自身の教会を立てられました。最悪の環境下に生きられたキリストはまた、キリストが愛されたように互いに愛し合うようにと弟子たちに最後の最後まで勧められました。それを伝えるようにと祈られて、人間関係の破れの中に教会を立てられ、それを実現可能にする神の道、イエス・

キリストを伝える役割を彼らに担わせられました。

教会は、世に対し破れを繕う神の働きを行うために立てられました。それは神の家族形成運動であり、愛し、愛される人間形成への招きでもあります。これを効果的に実現可能にする道が、小グループ形成運動の勧めなのです。

④ 信徒同士による共同牧会が必要とされています

どんなに優秀であっても、牧師一人のケアには限界があります。教会員が百人から百五十人を超えたと、牧師一人では面倒見切れない現実があります。ですから信徒同士の共同のケア、共同牧会が必須となってくるわけです。互いに祈り合い、助け合い、悩みも喜びも共有して生きるのです。七名〜十二名程の親密な家族的仲間が支え合って生きるのです。共に学び、共に祈り、共に仕え合い、共に賛美し、共に礼拝して生きるのです。

家族がそのようなことが理想です。しかし、家族崩壊社会の中で、多くの人々は真の愛の関係に飢えているのです。小グループは神の家族を形成し、この愛を充足するのです。

2. エテロ方式

ご承知のように荒野でモーセが、霊的・行政的指導者として一人奮闘していた時、舅のエテロが提言し、働きの委譲を示唆しました。エテロは言いました、『あなたのやり方は良くない。あなた自身も、あなたを訪ねて来る民も、きつと疲れ果ててしまうだろう。このやり方ではあなたの荷が重すぎて、一人では負いきれないからだ。わたしの言うことを聞きなさい。助言をしよう。神があなたと共におられるように。あなたが民に代わって神の前に立つて事件について神に述べ、彼らに掟と指示を示して、彼らの歩むべき道となすべき事を教えなさ

い。あなたは、民全員の中から、神を畏れる有能な人で、不正な利得を憎み、信頼に値する人物を選び、千人隊長、百人隊長、五十人隊長、十人隊長として民の上に立てなさい……。』モーセはしゅうとの言うことを聞き入れ、その勧めのとおりにし、全イスラエルの中から有能な人々を選び、彼らを民の長、すなわち、千人隊長、百人隊長、五十人隊長、十人隊長とした。こうして、平素は彼らが民を裁いた。難しい事件はモーセのもとに持って来たが、小さい事件はすべて、彼ら自身が裁いた」(出エジプト記十八の十七〜二六)。

このようにモーセの舅エテロは、モーセに十人隊長をも選ばせ、家庭的小グループの世話をさせております。ご承知のように、これは、大グループ内での役割分担の一つなのですが、この組織形態は効果的であったように思われます。それは人々の必要に応える組織形態であり、効率的に民を牧し、当然リーダー育成にも寄与したのです。日本の我が教会では、この十人隊長の選びと育成とが、今日まで欠落しております。

3. 初代教会の教会形成は大部分「家の教会」

これは言わずもがなですが、キリスト教会が発足して以来二十〜三十年を経た頃に書かれた使徒パウロの書簡の中で、挨拶を見ますと、『家の教会』的が主流であったと思われる。

日に三千人が導かれた時に至っても大教会を建造したという記録はなく、むしろ家の教會的歩みの姿が生きて描かれております。「そして日々心を一つにして、絶えず宮もうでをなし、家ではパンをさき、よろこびと、まごころとをもって、食事を共にし、神をさんびし、すべての人に好意を持たれていた。そして主は、救われる者を日々仲間に加えて下さったのである」(使徒行伝二の四六、四七、口語訳)。

もつとも、「百二十名ばかりの人々が、一団となって集まっていた」(同一の十五)との記録がありますように、必ずしも、すべてが小グループ的であったと考える必要はありませんが、少なくとも小グループから成る信徒の群れであったと考えられます。

ローマの地下墓所(カタコンベ)の例でも見られるように、恐らくキリスト教がローマの国教として受け入れられる時点までは、大教会の建造はなかったと考えても、間違いではないと思われます。

セブンスデー・アドベンチスト教会の初期の形成期も同様で、暫くは点在する家の教會的な動きであったように思われます。そして数十年を経て、米国のミシガン州バトルクリークに巨大教会ができ、世界總會も巨大病院も印刷所も学校もそこに集約的に集められ、アドベンチストの信徒たちが次々と一極集中的に集まるようになってきた時、神の預言者は繰り返し、民を一箇所に集めるのではなく、世界に証のために散らすようにとのメッセージを与えるようにさせられました。

「神の民が大きな社会に移住し、かたまつて住むということは、神の目的ではない。キリストの弟子たちは、地上における神の代表者たちで、神は世界の暗黒の中にある光のように、町、都市、村など全国いたるところに彼らが散らされるようにと計画しておられる」(「教會への証」第八巻・二四四頁)。

「自分の住居を変えたいと望む人々、神の栄光を表すことを目的とし、他人のためになり、キリストがご自分の尊い命をお捨てになった魂を救うことに、めいめい責任を感じている兄弟がたは、光がほとんど、あるいは全然ない町や村に、また、本当に奉仕ができる場所に移り、自分たちの働きと経験を通して他の人々を祝福しなければならぬ」(同第二巻・一一五頁)。

「わずかな力や感化力しかない場所から移住したり、引越してき

て、一つの場所に多くの人々の感化力を集中させることは、神が輝かせようと計画しておられる光を取り去ることになる」(同第二巻・六三三頁)。

このように、神の聖徒たちを至る所に散らし、証をさせるのが神の願いでありましたし、今もそうです。

そのような意味では、数年前、セブンスデー・アドベンチスト教団が「ガソリン・スタンド方式」で、教會・集会所・聖書研究会を至る所に作るうとした運動は、それ自体は間違いではなかったのです。しかし、問題の一つはその責任者を育てたり、サポートしたりする体制を整えずに、形だけを作ったところにこそあったのだと考えられるのです。支店長となる人材を育成輩出する努力なくして、支店だけを作れば、本店のお荷物にはなっても初期の目的を達成する働きは成らないのは、理の当然なのです。

4. 主は弟子たちを家族関係のような小グループで訓練

「十二弟子の任命によつて、キリストが去つたのち、地上でみわざを続ける教會を組織するための第一歩が踏み出された」(「患難から栄光へ」上巻・一〇頁)。

主は祈りの内に、弟子たちをリクルートし、彼らと三年有余、寢食を共にし、共に生活されながら、主の家族関係の中で彼らを育成されました。或はお言葉で、或は模範で、或は遣わされて、理論と模範と実践とで彼らを育成し、御霊の約束と共に、彼らに宣教という大任を与えられ、その任を委ねられました。天に帰られた後、お約束通りペンテコステの時を迎えさせ、彼らに霊の賜物という、押し出す力を与え、キリストの務めを各人に与え、神の働きをさせ、彼らを介して世界を引っくり返されたのです。それは主の家族関係における育成と

派遣でした。

「救い主は、弟子たちを教育するのに、天地が創造された時に確立された教育制度に従われたのであった。イエスの家族は、最初に選ばれた十二人の弟子たちと、なおその他、彼らの必要に奉仕するために時々彼らとの関係を持っていた少数の人々から成り立っていた。彼らは……いつもキリストといっしょであった」(『教育』八六、八七頁)。

二、小グループ伝道に対するエレン・G・ホワイトの勧め

現代の主のメッセンジャーは繰り返し、小グループ的組織の必要を訴えておりました。

「わが教会において、奉仕のために組を組織しよう。それぞれ異なった人たちが人をすなわける者として協力するようにしよう。彼らは世の墮落の中から魂を集めて、キリストの愛という救いの純潔さに導くように努力しなければならない」(『教会への証』第七巻・二二頁)。

「私は、誤ることのないお方から、クリスチャンの働きの基礎として、小さな組を組織するように示された。教会員の多いところでは、教会員を小さな組に分けて、教会員のためばかりでなく未信者のために働かせなさい。真理を知っている者が一か所に二、三人しかいないならば、その人たちで働き人の組をつくりなさい」(同二、二三頁。強調は著者挿入)。

「もし彼ら(小さな組の小グループ)がキリストの御名において働き、そして祈るなら、彼らの数は増加するであろう」(同二三頁。強調及びカツコ内は著者挿入)。

「善への驚くべき変化が、自己犠牲的な信徒の努力によってもたらされ得るのです。これらの取るに足りないと思われる働き人たちは、

多くのことを成し遂げるのですが、それは彼らが人間ではなく、愛顧をお与えになられる神に依り頼んで、絶えざる努力をし、忍耐深く事を運ぶからです。このような働き人たちが成し遂げた良き業が如何ほどであるかは、この世では決して計り知られることはないでしょう」(同二三、二三頁。強調は著者挿入)。

「聖書を自分たちで学ぶために、夕方や朝に小さなグループで一緒に集まるようにさせなさい。聖霊によって強められ、啓発され、清められるために祈りの時を持たせなさい。み言葉の学びのために小さいグループで集まろう。あなたはこのことによって失うものは何もなく、多くのものを得るであろう」(『今日も神と共に』十一頁(英文)。強調は著者挿入)。

「より少なく説教し、聖書を読むことや、家族や小さな仲間と祈ることによって、より多く教育しなさい。

わたしはキリストと共に働いているすべての人に言いたい。暖炉で人々に近づくチャンスがある時は、いつでもそのチャンスを生かしなさい。あなたの聖書を開いて、偉大な真理を彼らの前に示しなさい。成功は、知識や今までに成し遂げてきたことや、人の心に触れる方法を見つける能力によるのではない。社交的に人々に近づくことによって、もっとも有能な説教によるよりもうまく人々の思想の流れを変えることができる。キリストを紹介し、魂をキリストの側に獲得するには、屋外で動いている大衆に話しかけたり、或はホールや教会で説教するよりも、暖炉の傍らで家族に話したり、個人の家で小さな集まりで話す方がより効果的なことが良くある」(『福音宣伝者』一九三頁。強調は著者挿入)。

「家庭の団らんの中で、隣人の暖炉の傍らで、病人の病床の側で、静かに聖書を読み、イエスと真理のためにひとことを語ることができ

る。芽を出し、やがて実を結ぶ貴重な種がこのようにして播かれる」
 『教会への証』第九巻・一二九、一三〇頁。

「幾たびも幾たびも、看護師や伝道者や牧師や文書伝道者や福音の学究者として働くように、仲間（組）が形成され、十全の教育が施されるべきことが、私に示されております」（『健康に関する勧告』五四一頁）。

確かに、小グループ伝道が伝道のすべてではありませんが、人々との親密な関係が失われている今日において、説教に力を入れる余り、小さな組における親密な関係下における伝道の基本的な効用が見失われがちなのは、サタンの戦略にはまっているやに思われる程であります。一方、公衆伝道の成果が期待できない嘆きが処々に聞かれます。しかし、少数ずつではありますが、小グループですなどられる一人の魂は全世界より重いことを心すべきです。その積み重ねが神の教会を大きくしてゆくのです。

三、小グループの為し得ること

小グループ伝道の効用について、簡単にまとめてみますと、

1. 信仰者の存在意義の確認の場

信仰者たち各人に、一人でいれば惰性の中で見失われがちな、信仰の意味やその適用を共に見出してゆける場を提供することになります。

2. 宗教を生活の場に取り込む実験道場となる

如何にして「主が愛されたように互いに愛し合う」かの、実験道場となります。そして、その愛の広がりの中点となるのです。

3. 親密な信仰の友を得る

励ましを与えたり与えられたりする場ともなり、試みの時にも、去り行くことのない、主にある不動の信仰生活を可能にする友を得ます。祈りの友、学びの友、働きの友、賛美の友、主の栄光を求めて生きる友を、日常生活の中で得ることとなるのです。

4. 知・徳・体のホーリスティックな成長を与えられる場

大教会では埋没してしまいがちな、個々人のタラントンが育てられ、生かされ、大事にされるのです。小グループ的な神の家族関係内では、誰も単なる見物人や傍観者ではあり得ません。誰も無視されたり見過ごされることがなく、互いに関心を寄せ合います。互いに切磋琢磨があります。そして育てられるのです。

5. 信徒による指導が可能な場

知的で有能であることは期待されますが、誰も専門的な指導者としての訓練を必ずしも必要としない、万人祭司的な互いの存在を認めつつ歩む関係なのです。

6. 大集団に比し、比較的柔軟な対応が許され得る関係です

プログラムも内容も、また場所や担当者さえも比較的容易に変更したり、臨機応変に対応する可能性があります。

7. 伝道の最前線基地です

この世に設置されている教会の伝道の最前線基地であり、出先機関です。この世に遣わされている神の教会です。人脈伝道の最先端の場でもあります。

四 近代においても成功している伝道方法である

1. ジョン・ウェスレーの「クラス」

一七〇〇年代になって、ジョン・ウェスレーがオックスフォード大学で学んでいた時、学内に信仰的に熱心であった友人たちと共に、「ホーリー・クラブ」なるものを作りました。このグループは「メソジスト」とも呼ばれたのですが、後に弟のチャールズと共に、英国国教会から独立してメソジスト教団を設立するに及んだのですが、その大きな特徴は「クラス」形態でした。ジョンは一七九一年に亡くなりますが、その時にはその教団は十三万余の信徒、そして伝道者数は五百四十名余に及んだと言われております。

その著しい進展は、勿論彼の熱心もさることながら、一七三八年頃に経験した彼の回心とクラス形態の伝道法にあると思います。回心は、ローマ書研究に触れての信仰による義認であり、今日我が教会で三天使の使命として受け継がれている信仰簡条です。また、クラス形態がもう一つの大事で、今日の小グループ組織形態に相当します。彼らの「クラス」の取り決めは、

- ① 少なくとも、一週に一度は集まる。
- ② 特別な理由がない限り、決められた時間に必ず集まる。
- ③ 定刻に賛美と祈りとをもって集会を始める。
- ④ 自分が感じていることや、自分の状態をありのままに、自由に、率直に、互いに秩序をもって語り合う。また前回の集会以来に受けた誘惑について語り合う。
- ⑤ 自分の信仰状態や罪、誘惑に関して語るようにはじめに誰かにお願いし、それから、他の人たちも語ってもらうようにする。
- ⑥ 祈りをもって集会を終わる。

2. 純福音教会の「ホーム・セル」

ウィロー・クリーク教会もそうですが、今日私どもは、「小グループもある教会」ではなく、「小グループから成る教会」形成をして大成した小グループ伝道の成功例をいくつか見知っております。

十数年前にソウルの純福音教会を直接訪ねてみたことがありますが、当時、信徒数が既に七十数万人で、四万のセルから成っているということでした。一セル単位あたり二十人弱の構成で、この教会員数となるわけです。数万人が入るヨイドの大教会では日曜毎、七回の礼拝を行うとのことでした。世界一のプロテスタント教会でもあるのですが、まさに小グループから成る大教会形成です。男性優位が圧倒的な韓国社会で、牧師が倒れて働けなくなつて、その代役として、婦人指導者が数名立てられて、小グループ的「セル」単位での伝道活動を開始して今日までの進展を見ております。鍵は小グループ的な組織形態と同時にセル・リーダーの育成とサポート体制を確立したという点にあったと考えられます。勿論、チョウ・ヨンギ牧師の霊性と指導力も見逃せない要因でしょう。

3. SDA木更津キリスト教会や三育学院教会で

一九七三年四月から五年間、千葉県の木更津市内の新興団地入り口に新築された木更津教会で働く機会が与えられましたが、その早い時期に、『教会への証』の第七巻の「教会員のための働き」という一章を読みました。その文章は極めて強烈なインパクトを与える内容でしたが、小グループ伝道を含めたお勧めがその中にあり、少しでもその内容を実現できればと願って努力してみたことを懐かしく思い出します。

その五年間で、受洗者は六十七名、教会成長率は年平均十数パーセント。教会員は倍増し、バルコニーまで作ったりして対応に追われる

嬉しい成長がありました。青年たちの受洗も四十名近くあり、彼らをして「木更津バンド」を作らせたりも致しました。牧師・教会長老・医者・教師・事業家等、今も現役で第一線で働いている人材が生れました。それらの人材輩出の背景には、小グループ伝道を加味した働きと福音書研究を中心にした御言葉の学びがあったと思っております。

一九九〇年から十三年間、三育学院カレッジの神学科で奉職の機会を与えられましたが、その間の小グループ伝道に関係する出来事として印象に残っていることがあります。三育学院教会の信徒伝道部長の要請で、小グループ伝道に活性化を与える婦納法的研究のノウハウを講義させていただいたことがありました。それは、後述付録二に掲載している、「司会者技術十ヶ条」の講習会でした。主に神学生たちが聴講してくれたのですが、彼らが中心になって、当時の全学生の五人に一人は彼らを通して、学内の至る所で数人が集まって聖書を開いて学ぶ光景が今も目に映るように思ひ起こされます。ある神学生等は、卒論を延ばしてまで、聖書研究を優先して伝道しました。その結果と言っているのだと思いますが、年間で三十名余の大学生たちが洗礼を受けたのです。この事例は、たとえ伝道者としての訓練がいろいろな意味で未成熟ではあっても、ある種の訓練を受けた信徒による救霊の可能性を著しく例示している出来事とは言えないでしょうか。

小グループ伝道における、婦納法的・輪読会的聖書研究法と交わり関係は、聖霊のお働きを容易にし、サンフランシスコでもそうでありましたし、我が国においても同様に効果的な伝道の実を見ることを可能にするのです。

第三部 小グループ伝道の実施に向けて

実施計画には多様な側面を考慮すべきですが、基本的には、その計画を単純化しますと、人を働けるように育成し、その動機付けをし、仲間作りをしてもらい、そして派遣することなのです。育成のカリキュラムとか、伝道精神の高揚であるとか、意図して信仰の仲間作りをさせるとか、そして彼らを伝道に遣わし、その喜びや、また神が私たちを用いようとされている意義・価値を体験的に知っていただくといった方向付けなのです。この方向の中では特にリーダーや副リーダーやコーチ育成が鍵です。

そこで、ここ第三部では、まず育成の場としての安息日学校の時間を見直してみることと、それから家庭集会的小集会を至る所に開設して行く伝道戦略のこと、そして特に小グループ伝道に関わる指導者たちのリクルートの仕方と、そして最後に具体的なリーダー育成方法を取り上げてみたいと思います。

一、安息日学校のガイド研究時間を活性化する

我が教会で、教会員が集まれる最大の機会が安息日学校と礼拝の時だと思えます。いずれの時間も、楽しく且つ意味のある時間であるようにと切望されているのですが、それを阻害している要因を考え、またその楽しくも意義ある時となるようにとの目的を実現すべく、いくつかの試みが問われてきております。ガイドの簡素化とか、寄稿メッセージを入れるとか、日本人によるガイド作成とか、副読本の提供とか、年齢別や成長度に合ったクラス分けを図るとか、また時間を十分に確保するとか、小グループ的なクラス分けや座席の形の工夫とか、教

師会を持つとか、それはそれはいろいろの工夫が試みられてきました。

1. 教師と司会者の育成

しかし、振り返ってみて、興味を与える最大の要因となるものは、人的資源にこそあると思います。良い指導者がそこにいれば、人々は引かれるのです。どんな犠牲を払ってもその場に臨みたくなるのです。言い換えると、もし安息日学校の生徒や出席者が減つているとすれば、その最大の要因は、魅力ある教師が少ないということではないでしょうか。ガイドの内容の工夫とか時間を多くするとか、これらも大事ですが、魅力ある指導をする教師の欠落こそが、顧みられるべき最大の課題と思います。

こうした中で、教師が所謂教師ではなく、司会者的な技術を修得して、それを加味して用いますと、意外に活性化を見ることが多くあり、出席者の満足度を高める結果となっております。

2. 演繹法と帰納法

普通、教えるスタイルには大別して、演繹法と帰納法とがあります。前者は所謂、教師的教え方です。教える起承転結を明瞭にし、序論・本論・結論と論を進めて、与えられている命題を、聞く人々に、判り易く納得させる作業を行うのです。

それに対し、後者の帰納法なるものは、皆で考え合わせる作業です。教えるのではないのです。はじめに結論的な命題があつて、それを理解させるように説得的に教えようとするのではなく、皆で、いやある意味では各人が、自分にとっての結論を持つ形でもあります。高度に、各人に働かれる聖霊の感動に依拠して学ぶ形です。

人は、自分自身で言語化し、それを口で表現してみたものをもつて心に知識をとどめる傾向があります。ですから、クラスで、たとえばそ

れが一言であつても、発言の機会を持つということは、その人の成長に大変な関わりを与えるのです。それに加えて、グループ・ダイナミックスと呼ばれる参加者同士の相互作用が、大事な刺激を与えることになります。学びには聞くと同時に、語るという要素が非常に重要な役割を持つているのです。

折角一生懸命に学んできましても、教師の方向付けが的外れであつたり、その学んできたものを取り上げてもらえなかつたり、また、一週間学ぶ機会がなかつたのに発言を求められたり、或はまったく関心の無い主題に関する質問をされたり等致しますと、疲れます。あの四十分は何であつたのかとなります。

3. 安息日学校生徒の能力をも動員し、生かす集いに

日本のように高度に教育が進んでいて、しかも種々の文献・教材が容易に手にし得る国においては、座席に座らせられている生徒の方が、教師よりも知識も学びも経験さえも豊富であつたりする場合がしばしばあります。それなのに教師と呼ばれるお方による一方的な教えを受けると、それが余程、格差のある教師によるのでない限り、しばしば聞かされている者たちには辟易させられることと成りがちなのはよく判ると思います。

それに対し、司会者の教師の下にあつては、そこにいる出席者各人は、自分たちの状況や場や能力からの発言が可能であり、それをもつて互いに学び合う形の学習法です。それは帰納法的手法と呼ばれ、また俗に輪読会的要素を加味した学習法です。この手法を取り入れると意外な程にクラスが活性化します。しかしその際、ある種のルールをしっかりと踏まえていないと、ぶち壊しになることもしばしば経験します。ですから、司会者はその有効な技術を修得する必要があります。

ます。それは極簡単な技法です（付録の「司会者技術十ヶ条」は、著者が開発したもので、基本を押さえて使っただければ極めて有効な技法です）。

4. 教師と司会者の数と司会者技術について

確かに、一方的に話をして人も人を引き付けてやまない優秀な教師はおりますし、このような教師の養成はとても大事です。しかし、このような真に優れた教師としての霊的賜物を有する教師は、一般に一パーセント以下しかおりません。しかし敢えて言うなら、このような稀な優れた教師であっても、もし彼或は彼女が婦納法的要素を取り入れるなら、極めて有効な結果をもたらすものであることを発見するでしょう。他方、司会者の教師は十ないし十五パーセントはおりますし、この人々が教師的な演繹法によるのではなく、婦納法的手法を用いることにすれば、その学び会は活性化され、盛り上がるのです。

安息日学校ガイドの研究会である安息日学校の場合、ガイドは演繹的に書いてありますし、著者の明快な意図を反映している内容ですから、それは、教師が教えるような内容なのです。しかし、このガイドを使って学び合う時、教師は司会者の要素を加味することによって、そのクラスをより豊かに活性化させることができるのです。すなわち、グループ・ダイナミックスによる学びです。皆が発言の機会を必ず持つるように意図されているのです。ガイドの目標を踏まえつつも、尚、各人のニーズに応え得るようにするのです。相互の言葉を交換する中で、真理を自分で発見し、それを自分で言語化する機会を与えるのです。学びにおいては、教えられてよりも、自ら悟ることの方が学習効果が高いためです。教えるよりも自ら悟っていただく方途です。

5. 「聖霊」を究極的な教師として信じ仰ぐ

私が奨励している婦納法的聖書研究会の最大の特徴は、実は、教師を人間教師ではなく、聖霊という「あらゆる真理に導いてくださる」お方に明け渡して学び合うという点にこそあります。このような学び合いの道は、人々を人間教師の二番煎じ、三番煎じ、或は出がらし的な教えの呪縛から解放する生き方と言っても過言ではありません。人々に一番茶を飲んでもいただくように、そして聖霊の言葉に直接に触れさせ、直接に聖霊に印象付けていただく、教えていただくように図ることなのです。元来聖霊の言葉であった聖書を、人間的解や手法を超えて、聖霊の解や手法に明け渡し、聖霊に解説していただくことを意図するのです。ですから、真に聖霊に働いていただけるような学び合いでは、当然、人は生き生きとなるのです。

二. 「小グループ伝道所」を教会内外至る所に設立する

今から二十数年前、一九八〇年代初頭、北九州のSDA芦屋キリスト教会で臨時に牧師として働かせていただきました折、非常に印象的であったことの一つは、どの市町村にも、電話帳にバプテスト教会の伝道所が掲載されていたということでした。信徒数からして、それらが全て教会的な建物や集会を意味していないことは明らかで、きっと信徒の各家庭を伝道所の名前にして電話帳に載せてあるのだと思います。したが、その宣教戦略と、またその心意気の素晴らしさに感服したものです。

伝道所と呼ばれるに相応しい、SDAの小グループの砦を日本全国の至る所に設置することが、今日の宣教戦略としては是非とも実現を見ねべき方向付けであると心掛けて行きたいものです。

1. 小グループ（神の家族的関係）形成

① 目標、それは愛の関係回復、愛の交わりです

a. 愛の交わりを深める。小グループ活動における最終目標は何だと思えますか？ 学びですか？ それとも活動ですか？ 意外と思われるかもしれませんが、それは神の似像を反映するような愛の交わり関係です。キリストにある豊かな人生を互いに見出し、成長し、神の家族関係の素晴らしさを体験して歩む、愛の交わりです。終末時代の支えを励ましを互いに得るのです。

b. 教理よりも温かい交わりを必要と感じている人々が多い。

米国のある教会で、その教会を去った七十五人のメンバーの中で、教理の故に去った人たちは、たったの二名であったとの報告があります。

c. 七名以上の友人が必要。あるグループの中で、もし七名以上の友人がいれば、その人はその群れから去らないという統計があります。教会の中で、もし七名以上の信仰の友を有しているような関係を形成できるなら、その人のバックスライディングは殆んど考えられないということになります。少なくとも七名以上の信仰の友・仲間作りをさせることが大変大事です。

d. 教会内での奉仕の機会が与えられることが大事です。愛という霊の実を豊かに結ぶ為には、キリストのくびきを負う生き方が必須です。「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとにきなさい。休ませてあげよう。わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの軛を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽いからである」（マタイ十一の二八―三十）とキリストは言われました。「教会員が霊的に成長するには、主が彼ら

にお与えになっている重荷、すなわち魂を真理に導く重荷を負わなければならないということを、牧師は教会員に教えよう。自分の責任を果たしていない人々を訪問し、共に祈り、彼らのために骨折らねばならない。教会員を牧師に頼らせてはならない。むしろ、彼らが周囲の人々に真理を伝えるのに、自分のタラントを用いるように教えなさい。このように働く時、彼らは天使の協力を受け、信仰を深める経験をし、神に強い信頼を持つようになる」（『福音宣伝者』二〇〇頁）。

② サイズ、それは十二人以下の小グループ

a. 二十二人での、気の合う仲間作りを致します。

b. メンバー全員が自由に発言することができ、祈り合いにも参加することができる人数です。余り大人数ですと、発言の時間が短くなり過ぎます。

c. グループの人数が十二人以上になったら、副リーダーの下で、注意深く、暖簾分けして行くことに致します。細胞分裂的にでもあります。

③ 集会の場所

a. 交通の便や快適な居間とか、比較的皆が集まり易い所で集会を持つことにします。

b. 教会だけでなく、家庭でも、職場でも、公共の集会所であつても、至る所で集いを持ちます。

c. できればリーダーの家が理想かもしれませんが。

2. 定期集會

① 集會の回数と長さ

原則として、週一回、時間は一時間から二時間位の集會とします。

毎週一回の定期的集いはリズムを与えて有効です。安息日学校もその一つです。

② 集会の座席の配置

全員が顔を見合わせてディスカッションできるような円形座が理想です。教師対その他の形ではなく、司会者の教師も他のメンバーの一員として埋没している形が理想です。発言する時、メンバーが教師に對して語るのはなく、メンバー全員に向かって自然にお話する形の座形が理想です。

3. 集会内容の要素

祈り・学び・働き・賛美・礼拝の五つの要素が必須です。

① 祈り

イエス・キリストの御名による祈りでもって、父なる神とつながる関係ほど、この世で力強い助けを得る道はありません。人が生きるにあたって呼吸の要素に譬えられるほど大事です。

主イエス・キリストは、弟子たちへの遺言的お言葉の中でその大事さを「任命」という用語で示しておられます。「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。あなたがたが出て行って実を結び、その実が残るようにと、また、わたしの名によって父に願うものは何でも与えられるようにと、わたしがあなたがたを任命したのである」(ヨハネ十五の十六)。この父なる神との関係回復を豊かにする道は、主イエス・キリストのお言葉を聞いて御父を信じる(ヨハネ五の二四)、或は主のお言葉が私たちの内にいつも生きて存在する程の状況(ヨハネ十五の七)を生み出すことです。使徒パウロが言うように、「信仰は聞くことによるのであり、聞くことはキリストの言葉から来る」(ローマ十の十七、口語訳)のです。ですから主のお

言葉の学びが大切な要素となるのです。

② 学び

神の御言葉から、イエス・キリストと父なる御神とを学び知ることが肝要です。旧約聖書を指して主イエスは、「聖書はわたしについて証しをするものだ」(ヨハネ五の三九)と言われました。新約聖書はナザレ人イエスこそが預言されていたキリストであったのだと証言している二十七巻の文書です。旧新約聖書を通して、キリストと神とを親しく深く知る道こそが、神がわたしたちに与えようと願っておられる永遠の命を得させていたための学びに意味を与える根幹なのです。

十二弟子筆頭と言われているペテロも、「神と私たちの主イエスを知ることによって、恵みと平安が、あなたがたの上にますます豊かにされますように。というのは、私たちをご自身の栄光と徳によってお召しになった方を私たちが知ったことによって、主イエスの、神としての御力は、いのちと敬虔に関するすべてのことを私たちに与えるからです」(第二ペテロ一の二三、新改訳)と言っています。

キリストを親しく深く知る、そして神を知る、これが学びの基本的な方向付けです。真の回心の経験は主イエスを知り、神を知ることにより鍵があるからです。

「我々は主を知ろう。

主を知ること追ひ求めよう

主は曙の光のように必ず現れ

降り注ぐ雨のように

大地を潤す春雨のように

我々を訪れてくださる。」(ホセア書六の三)

使徒パウロが弟子テモテに送った有名な言葉を反芻してみたいと思います。「この書物(聖書)は、キリスト・イエスへの信仰を通して救

いに導く知恵を、あなたに与えることができます」(第二テモテ三の十五。カッコ内は著者挿入)。

③ 働き

小グループのメンバー同士の共同牧会だけでなく、周囲の人々の救霊にも寄与する生き方が問われております。キリストの愛の実践の場となるのです。「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」(ヨハネ十三の三四)、「互いに愛し合いなさい。これがわたしの命令である」(同十五の十七)。家族関係的な主にある親しい交わりである小グループのメンバー各位が、その関係を深め、バックスライダー的脱落を防ぎ、異端的生き方から守られ、また霊的成熟も可能にされ、終末時代の「神の戒めを守りイエスの信仰を持ち続ける聖なる者たちの忍耐」(ヨハネ黙示録十四の十二。私訳)を可能にします。

不動の信仰生活を支える七名以上の信仰の友垣を作る交わりが実現してゆき、福音の進展が見られるようになります。神が働かれ、数も増えてゆくようになるのです。

「キリストのみ名の故に働き、そして祈る時、彼らの数は増加するであろう。何故なら、『どんな願い事であれ、あなたがたのうち二人が地上で心を一つにして求めるなら、わたしの天の父はそれをかなえてくださる』(マタイ十八の十九)と主が言われたのであるから」(教会への証 第七巻・二二頁)。

④ 賛美

使徒パウロは、「すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって、神があなたがたに求めておられることである」(第一テサロニテ五の十八、口語訳)と勧告しましたが、しかしながら、神は害になることについて感謝せよ、とは決して言われないうのですか

ら、常につぶやきを排除し、何事であれ感謝し、喜ぶ習慣を身に付けたいものです。

「感謝と賛美の精神ほど心身の健康を増進するものはない。憂鬱、不満な気持や思想に抵抗することは祈ることと同じように積極的な義務である。」「歌をもつて神をほめ、感謝をささげなさい。」「歌は失望するときにいつでも用いることのできる武器である」「苦痛と歓喜は一日の行程のちがいであり／悲しみと喜びは近くに住んでいる。……メラもエリムも過ぎ去って／泉も棕櫚もやがて消え去るであろう。そしてついにわたしたちは神の都に達するのだ／ああ、なんと楽しい国／人生の荒野のさすらいが尽きるところ／ああ、天上のきよいパラダイスよ」(『生活を豊かに』二一九、二二二、二二三、二二九、三〇頁)。

人生の最も暗黒の時であっても、キリスト・イエスにあっての神と共なる人生下では、神への賛美がその特色であるべきです。

⑤ 礼拝

祈りも学びも働きも賛美も好きだからするという要素があり得ます。言わば趣味的です。しかし、「何事をなすにも神の栄光のためになすべき」とのパウロの視点(第一コリント十の三一参照)が大事です。神の栄光を求めて賛美をするのと、歌うのが好きだから歌うのでは、月とスッポン程異なります。学びにしても働きにしても祈りにしても、神の栄光を求めて参与することが、濃く彩られている交わりが、小グループを特色付けてあるべきです。

4. 小グループを健全にする側面について

小グループを健全にするためには、以下の七項目程の側面を考慮する必要があります。

① 主イエス・キリストを中心に集いにします。それは主を切に

- ② 気持ちは大切に。互いの交わり関係において「気持ち」を汲み上げることはとても大事です。決して感情を無視しない、大切にしていけるような人間関係は交わりを深めるにおいてとても大事な要素です。
- ③ 了解事項を互いに尊重。グループの目的やその為の手段・方法について互いに理解し合う。
- ④ 献身的。目的遂行の方途に積極的・前向きに取り組むのです。また時間厳守や集会を休まないように努力したりして、互いに励まし合うことを旨とし尊重することが大事です。
- ⑤ あくまでも優しく思いやり深く。人生の本質的部分であるこの学びと実践とに切磋琢磨するのです。
- ⑥ 聖書の学びを土台に。聖書により、イエス・キリストと神とを知ること、神人関係並びに人人関係回復という救済活動・救霊の土台であります。聖書という神の言葉は信仰と行為の唯一の基準であることを常に確認して歩みたいものです。
- ⑦ 「イエスの証」に信頼。神から「残りの教会」に預けられたもう一つの神からの証、そのメッセージに信頼を寄せながら、今日を歩むことはとても大事なことです。聖書は基準、預言の霊は基準である聖書に私たちを導く働きであって、両者の役割は明瞭に異なりますが、いずれも神から与えられた言葉でありますので、現代への預言の言葉を重視して生きる必要があります、それは終末時代の神の「宝の民」、残りの民を形成するのに極めて大切な役割を

果たすのです。

- ⑧ 対話を重視。主は弟子たちを友と呼び、彼らの為に命を捨てることを約束され、神に祈るように再三命令されました。この御約束やお勧めに基づき神に祈り求め、神との対話を深めることは、他方これは人との関係を密にする為の重要ポイントともなります。イエス・キリストは御名によって祈る命令をなさいましたが、このことは本当に大いなるお恵みです。主の喜びの生活への招きでもありました。この御力を背景にして弟子としての選びをなされ、実である「互いに愛し合う」という素晴らしい命令をなされたのです（ヨハネ十五の十六、十七参照）。神と人との親密な交わり関係が大切ですね。

三、小グループ・リーダーのリクルート

主は祈りの内に弟子たちをリクルートされ、彼らを教え、訓練し、世界を引っくり返されました。「神はご自分の教会が、世に光を与える働きのために教会員を訓練し、用意することを期待しておられる」（『教会への証』第六巻・四三二、四三三頁）。「わが教会を築きあげるのに今必要とされているものは、教会の中のタラントすなわち主のご用のために教育できるタラントを見分けて、これを伸ばすために賢明な働き人がよい働きをすることである」（『教会への証』第九巻・一一七頁）。「教会ができる、その教会員の中から、他人に真理を伝えて新しい教会を興すような人が召されなければならないということ、従って彼らはみな働いて、神から与えられたタラントを最大限に用い、主の奉仕にたずさわるために、知能を訓練しなければならないということを示さなければならない」（『教会への証』第三巻・二〇五頁）。

行き当たりばったりでなく、組織的・継続的に確かな形での人材リクルートと、これを弟子化し、育成する計画が教会には必須です。

1. リーダーのリクルート

① 祈って招き、それに応答する人々の中から選ぶのです。必ずしも人望等、既にでき上がっている人である必要はありません。最大の資質は、「やる気があつて、暇があつて、従順と柔軟性と主に対する献身と謙遜さが目だっている霊的な人」であることです。勿論、リーダーとして立つ時は、人望厚いことも大切な要素であることは論を待ちません。

② ティーチャブルな人。全体の責任者たることのできる人でもあるべきなのですが、必ずしもその資質が最初からでき上がっている人である必要はありません。必要なリーダーシップは、神がお育てくださり、備えてくださいます。

③ お世話できる人。集会をリードしたり、デイスカッションの司会をしたり、会員各位のお世話を引き受け得る人材です。

④ 「チポコゴリ」な人。明るくて常に前向きで、信頼性厚く、明快な目標を有する指導者で、権限委譲型の指導者を「チポコゴリ」な人といいますが、このような資質を持っている人、並びに養い育て得るような人々を多数得られるように祈り求め、図ります。

2. 次のリーダー養成が必須

単に目の前のリーダーのリクルートだけではなく、次世代、並びに次次世代のリーダーを育成してゆく視点が大事です。後継者を視野に入れた育成計画です。暖簾分けをしてゆける人材を育成することを目指すのです。

リーダーは常に、自分と共に副リーダーを置き、更にその次に指導者となってゆける人をも視野に入れながら、チーム作りをして働くのです。後継者を考えながら、信仰の仲間作りをするのです。

3. リーダーのコーチ役が必要

「コーチング」という言葉がありますが、人は種々の面で第三者からの親しい助言を必要としている存在です。微調整をも含め、様々な面での励ましや軌道修正や方向付け等、現場で働きを進めてゆくにおいてリーダーたちによるコーチをしばしば必要とします。現実に当面する様々な問題に対処する知恵やアドバイスを必要とします。共に祈り、相談し合い、助け合える、そして励ましてくれる温かい先輩の間が必要で、組織としてコーチを決めてあげることが必要です。

4. 「教師」と共に「司会者」的リーダーを動員する

真に教師的能力のある人は、全体数の一パーセントもおられるかどうか。しかし、司会者のリーダーたり得る人は、十〜十五パーセントはいらっしゃるという統計です。

教師の養成は必須ですし、これを輩出する努力を今後ともおさおさ怠りなきようにすべきですが、しかし同時に、「十人隊長」的リーダーである司会者技術を身につけた指導者は、意図すれば、教師に比して二十倍強も得ることができます。そして、これらの人たちを動員できれば、我が国の伝道進展に、今日著しく寄与するところとなりますので、とても大事です。

四 小グループ・リーダーの育成とその実施

この項目こそは、今実際に重要視されるべき内容であり、実施可能な提案を試みようとしております。回心したアドベンチスト指導者育成のイロハの提言です。

1. 教会は伝道の訓練センターとなるべき場

キリストの弟子作り、すなわち福音宣教の信徒伝道者を育成する働きは、教会の、したがってその指導者たちである牧師・長老方の重要な責務の一つです。今日、教会並びに、牧師・長老の働きのパラダイム・シフトが問われております。

「あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」(マタイ二八の十九二十)。大宣教命令の中心はキリストの弟子作りであり、御言葉を教え実行する教育であり、これの連鎖的進展です。

そのため、預言的メッセンジャーの言葉にも再三にわたり、大宣教命令に沿った教育の勧告が繰り返されております。

「すべての教会がクリスチャンの働き人を養成する学校でなければならない。その会員には聖書研究の授け方や安息日学校の組の運営と教授法、貧しい人を助け、病人を看護する最善の方法、悔い改めていない人のために働く方法を教えないといけない。また衛生問題を教える学校や料理学校、あるいはクリスチャン的ないろいろな方面の助けになる働きを教えるクラスが経営されるべきである。そして単に教えるばかりでなく、経験のある教師の下に、実際の仕事をしなければならぬ」(『ミニストリー・オブ・ヒーリング』二二頁)。

「教会の霊的監督の任にある人は、教会員の一人一人が、神の働きの何らかの役割を果たすような機会を与えるように、その方法を計画すべきである。これがなされていないことが、これまでに幾度もあった。すべての人のタラントが活発な奉仕に用いられるように、計画をはっきりたてて、これを全面的に実行することがなされていなかった。そのために、どれほどの損失があったかを認めている人は少ない」(『教会への証』第九巻・一一六頁)。

「どの教会においても、教会員が魂をキリストに導くために、時間をささげるように訓練しなければならない。……キリストの群れに責任を負っている者は、その責任に目覚めて、多くの魂を働かせなければならぬ」(『教会への証』第六巻・四三六頁)。

「牧師が教会員に与えることのできる最上の助けは、説教することではなくて、彼らのために働きを計画することである。各人に何かすることを与えなさい。……そしてすべての人に働く方法を教えなさい。特に、新しく信者になった人々が、神と共に働く者となるように教育すべきである」(『教会への証』第九巻・八二頁)。

「教会員は働かなくてはならない。彼らは自分自身を教育し、目の前におかれている高い標準に到達するように努力しなければならない。もし彼らが主と協力するならば、主はこの標準に到達させてくださるのである」(『教会への証』第九巻・一四〇頁)。

霊的戦いの先兵として第一線に遣わされる教会員の訓練教育について、次のようにも言われております。「何時間ものあいだ、兵隊たちは背囊を背中からはずしたり、それをまたすぐに背負ったりする訓練をする。彼らは銃を組んだり、それを敏速に手にとったりすることを教えられる。彼らは敵を攻撃する訓練を受け、また、あらゆる種類の演習を仕込まれる。こうして訓練が続けられて、どんな危急にも応ず

る準備ができる。インマヌエルの君のために戦っている者は、靈的な戦いに対する準備にこうした兵隊たちよりも不熱心だったり、骨身を惜しんだりしてよいだろうか」（『福音宣伝者』七五頁）。

2. 弟子化と共にリーダー育成の組織化

組織的・継続的リーダー育成のためのカリキュラム作りが必須です。主のメッセセンジャーは次のようにも言っております、「戦場における作戦を成功させるために、訓練と秩序が必要であるならば、われわれの従事している戦いにおいては、それ以上に訓練と秩序が必要である。というのは、われわれの到達すべき目的は、戦場で敵対している軍勢が争っている目的よりも、もっと高貴だからである。われわれの従事している戦いには、永遠の利害がかけられているのである」（『教会への証』第一巻・六四九頁）。

「神は、イスラエルの時代と同様に、今日も神の働きにおいて、秩序と組織を要求される。神のために働いている者は、だれでも軽率で中途はんばなやり方でなくて、物事をよく考えてしなければならぬ」（『人類のあけほ』上巻・四四七、四四八頁）。

① 「暇があつて、意気込みのある人々」を集めて、組織的・継続的に訓練を与え、自立した成熟したキリスト者、そして指導者となるまでの育成カリキュラムが必要です。

② 資質のある人をリクルートし、これを育成し、この人々が世に派遣され、更にこの人々が資質ある人々をリクルートし、育成し、世に派遣するといった、連鎖と続く連鎖のプログラムを作成し、これを軌道に乗せる必要があるのです。

3. 「十人隊長」的な小グループ・リーダーの育成と動員

今日の日本のSDAには二千数百名の、「十人隊長」たる、小グループ・リーダーとなり得る能力のある人材がおられ、このような素晴らしい人的資源を保有しております。

① この二千数百名の信徒リーダーを育成し、動員することを図るのです。
② リーダー・副リーダー・更にリーダーの次次候補をリクルートして教育することを図るのです。常時、少なくとも教会員の三分の一に相当する人々を育成してゆくプログラムとなります。

4. 訓練の実施

訓練の実施には種々の面と方法が考えられますが、特に継続的・組織的であることを目指し、以下の諸提案をさせていただきます。

① 自習と、週毎の小グループ集会と、月毎の特別講義と、期毎の特別講習会等を併用して第五項に提案されているようなカリキュラム内容を受講できるように、教会・教区・教団は検討くださるよう提案したいのです（付録一の「広島北信徒指導者養成学校カリキュラム」をも参照のこと）。

② 三育学院カレッジに通えるか、一年間入寮して入学が可能な人は、「信徒大学講座」を受講する。

③ 「不忘山麓聖書塾」（FBL）のような私的機関も用いる。

④ インターネットや通信講座による全国ネットでの教育の可能性を探る。今般はこの形の具体案は示していない。

5. 一年半位の訓練で小グループ・リーダーの第一歩を

一年有余の自習・聴講・実地訓練等の学習を経て、少なくとも【初級】リーダーの終了をもって、小グループ集会の初期のリーダーとし

て働き始め得るものとする。

6. 「司会者技術指導員」育成講習会を二～三年

- ① 八～十時間の講習会
- ② 小グループ伝道の基本理念に三時間
- ③ 「司会者技術十ヶ条」の講習に一時間半
- ④ ロールプレイに四時間半
- ⑤ 証や質疑やディスカッションに小一時間

この「司会者技術指導員」育成の為の講習会を呼び水とし、それが軌道に乗って、次々と次世代の小グループ・リーダーが生まれて行ける体制が定着するまで、各地で二～三年開催してみることにし、小グループ伝道の後押しを図る。

小グループ伝道の基本理念を理解した指導員を育成し、これを動員することができるかどうか、成否の鍵となります。

7. 小グループ・リーダーの支援体制として、「主事」や「コーチ」役の人物を各教会に置けるように図る

これらの役割は、三～七年の教育訓練をもって可能な、中級・上級のリーダーたちの中から選任されることが望ましい。

五 三段階カリキュラム

1. 【初級】

- a. 福音書（講義が小グループでの一書の学びを終了）
- b. SDAの基礎教理（旧VOP聖書通信講座本科終了）
- c. 『各時代の希望』（通読・読了）

- d. 「信仰による義認」（『行いと信仰』等を参考書として通読し、七時間程度の講義を受ける）

2. 【中級】

- e. 「司会者技術」（講義と数回の実習）
- f. カウンセリング初級（講義とロールプレイの実習）
- g. オプション（どれか一つのオプション講座を終了する）
- h. 福音書（初級で学んだ以外の一書とする。但し共観福音書からのどれか一書とヨハネ福音書とを講義が小グループでの学びで終了する）
- i. SDA教理（『アドベンチストの信仰』の通読と三十時間程度の講義を受ける）
- j. 『希望の光』通読（『各時代の希望』以外の諸書を『希望の光』で通読・読了）
- k. 証の書論（『エレン・ホワイトをどう読むか』の通読と七時間程度の講義を受ける）
- l. 残りの教会論（『残りの教会の特徴』野崎金一著の通読と七時間程度の講義を受ける）
- m. カウンセリング中級（十時間程度の講義を受ける）
- n. ダニエル書（『王とわたしと主の祈り』村上良夫著を教材にしたりして、七時間程度の講義を受ける）
- o. オプション（初級とは別のオプションを一つ受講する）

3. 【上級】

- p. SDA教会史（『再臨を待ち望みつ』ジョージ・ナイト著等の通読と七時間程度の講義を受ける）
- q. 聖霊論（『あなたの友聖霊』モーリス・ペンデン著の通読並びに、『聖

霊』ヒリー・グラハム著等を参考書として、七時間程度の講義を受ける)
 r. 預言の霊(安息日学校副読本『預言の霊』ファンドル著の通読と七時間程度の講義を受講)

s. 説教(『心に触れる説教とは』羽鳥明著を通読。古典的名著『説教』後藤光三著、『説教入門』ハットン・ロビンソン著等を参考書として、七時間程度の講義と、五時間程度の演習と、三回程度の実習をもつて終了とする)

t. 聖書解釈学(『聖書解釈学概論』バーナード・ラム著の通読と七時間程度の講義を受ける)

u. 教会成長学(『教会を成長させるリーダーシップ』ピーター・ワグナー著の通読と七時間程度の講義を受ける)

v. パウロ書簡(ローマ書等、どれでも一書を講義か安息日学校での学びをもつて受講とする)

w. オプション

4. 【オプション】

a. 教会史

b. 他教派研究

c. カウンセリング上級

d. 伝道学

e. 訪問伝道法

f. 聖書教授法

g. 新約聖書緒論

h. 旧約聖書緒論

i. 礼拝学

j. 旧約聖書の一書

k. 宗教学

l. その他、牧師が認定した十時間程度の講義

六. 如何に小グループ活動を開始するか

最後にどのようにして小グループを始めるかの試案を取り上げます。

1. 準備

① 祈り、神の導きを求めます。特に、グループ活動をするにあたって、相応しい人材を得るためには、聖霊の導きが必要です。

② 型にはめないように留意する必要があります。神は優れた方法ではなく、優れた人をこそ求めておられます。愛の人間関係回復こそが求められている目標であることをゆめゆめ忘れないようにすべきです。

③ 他者から学ぶ姿勢も大切です。コーチングを受け入れるのです。経験のある他のリーダーたちの意見を聞いたり、その世界の書物を読んだり、セミナー等にも積極的に出席したりします。

2. 交渉開始

① 既成のグループで始めることを、必ずしも考えないようにしましょう。相応しい人を集めていただくようにお祈りします。

② 小グループ活動を始めようとしていることを、種々の方法で人々に伝達致します。教会週報、教会機関紙、掲示板、電話、メール、はがき、チラシ等々で。

③ メンバーとなり得る人々の名前をリストアップし、接点を持つよう

にします。ビジョンを共有できるまで語り合います。

3. 会合開始

① できるだけ早急に、関心を寄せた人々と会合を持てるように工夫します。

② 強制的、或は機械的に小グループに属するようにしてはなりません。自発ということがとても大事です。

③ グループ参加の動機はいろいろとありましょう。しかし、メンバー各位は小グループの体験を願う人たちであると共に、キリストにある成長、そしてその変革がある程度は願い、期待する者たちであります。

4. 目標設定

① 小グループ形成の、

a. 何故小グループを作ろうとしているかの理由を確認し合う。

b. 最低限の短期・長期目標を確認する。

c. プログラム内容や構成人員や将来の暖簾分け等の互いの要求事項を確認し合う。

② 各人の必要によつては、他のグループを紹介したり、他の方途をも模索する。

③ 会合の時間と場所、暫定的なリーダーや、その他のお世話役等をも決定しておく。

5. 前進

① 導かれている人々がそこにある限り、数を気にしない。主の集いには主が臨在されます。そして、「一人の魂は全世界より重い」

のです。

② この小グループ活動は必ず発展し、成長する主の働きであると見ることに致します。信仰を持って前進したいと思います。

結語

この小グループ伝道は、「誤ることのないお方から、クリスチャンの働きの基礎として小さな組を組織するように示された」と言われている働きです。したがって、賢明に事を運べば成功しないわけがありません。

全信徒を解放し、動員し、心を一つにして、三天使の使命である万物を創造された神と御子と聖霊の神を礼拝する招きを、津々浦々でさせていただくのです。キリストの弟子作りという大宣教命令を、今日、生き生きと実現する場がここにあります。

主が遣わすと約束された「助け主」である聖霊を教師と仰ぎ、「御霊の剣、すなわち、神の言」を取るのです。すなわち、その証の中心であるイエス・キリストをこそ学び、そのお方との出会いを果たすのです。そして、その体験を深める掛け替えない場として、小グループ集会を、日本全国至る所に立ち上げるのです。神の御臨在をいただく神の家族形成を、市町村の至る所で形成しつつ、喜びの内に再臨を待ち望むのです。

一集会あたり、必ず平均一人は導かれることになりますので、小グループ・リーダーの育成とその動員により、千人〜二千人を皮切りに、終末をもたらず証の完結に向けての救霊の黄金時代を迎えることとなります。

不毛と見える祖国日本の地にも、福音の光が明々と輝き亘る、まさに夜明けの時を迎えるのです。
そして御再臨を共に待ち望むこととなります。主にある各位の御健闘を祈ります。

付録

一・広島北信徒指導者養成学校カリキュラム

SDA広島キリスト教会の数名の有志が、自己研鑽の一つとして、指導者養成のカリキュラムを作成されました。行き当たりばったりではなく、組織的・継続的な教育プログラムを立ち上げて、現実的に可能と考えられる、リーダー研修計画を立てたという内容が、以下のカリキュラムです。

【初級】

- ① 福音書中の一書（小グループの聖書研究会にて）
- ② SDA基礎教理（旧VOP聖書通信講座本科、自習）
- ③ カウンセリング初級（傾聴の技術を中心に、特別講義）
- ④ 『各時代の希望』通読（自習）
- ⑤ 『信仰による義認』『信仰と行い』『清められた生活』等を教材にして、特別講義
- ⑥ 司会者技術（特別講義と十回以上の実地訓練で終了証）
- ⑦ オプション

【中級】

- ① 福音書（初級で修得した福音書が共観福音書であればヨハネによる福音書を、それがヨハネによる福音書であれば、共観福音書中の一書を）
- ② SDA教理（『アドベンチストの信仰』を教材にして、三〇時間程度の特別講義）
- ③ カウンセリング中級（特別講義）
- ④ エレン・G・ホワイト論（『エレン・ホワイトをどう読むか』ジョージ・ナイト著を教材に自習と特別講義）
- ⑤ 教会論（『残りの教会の特徴』野崎金一著を教材にして、自習と特別講義）
- ⑥ ダニエル書（『王とわたしと主の祈り』村上良夫著を教材にして、特別講義）
- ⑦ 証の書の通読（『希望への光』の通読、自習）
- ⑧ オプション

【上級】

- ① SDA教会史（『再臨を待ち望みつ』ジョージ・ナイト著等を教材にして、特別講義）
 - ② 預言の霊（フアンドル著の安息日学校の副読本を教材にして、特別講義）
 - ③ 聖霊論（聖霊のバプテスマ、聖霊の実、聖霊の賜物、聖霊の内住等、聖霊に関する諸相に考察を与える特別講義）
 - ④ 説教（特別講義と少なくとも三回の実習）
 - ⑤ 聖書解釈学（『聖書解釈学概論』の通読と特別講義）
 - ⑥ 教会成長学（特別講義）
 - ⑦ パウロ書簡（ローマ書等、どれでも一書を特別講義で）
 - ⑧ オプション
- 【オプション講座】
- ① 教会史
 - ② 他教派研究
 - ③ カウンセリング上級
 - ④ 伝道学
 - ⑤ 訪問伝道法
 - ⑥ 聖書教授法
 - ⑦ 新約聖書概論
 - ⑧ 旧約聖書概論
 - ⑨ 宗教学
 - ⑩ 礼拝学
 - ⑪ 旧約聖書の一書
- 【カリキュラムの実施方法】以下の五通りを併用し、実施。
- a. 日常生活での自習
 - b. 毎週の小グループでの聖書研究会
 - c. 毎月一回の講習会
 - d. 毎期一回程度の特別講義
 - e. 並びに随時持たれる講習会

因みに、二〇一〇年度の各期一回の特別講義では、「説教」、「信仰に

よる義認」、「司会者技術」、並びに「聖霊論」等を学ぶ予定になっているようです。五月に開校式が行われる予定とのこととす。

二、司会者技術十ヶ条

1. 出席者全員に平等の発言の機会を与える

「①テキストを、②さんから、③時計回りで、④一節ずつ、⑤一度輪読します。⑥読み終わったら一言ずつ仰っていただきますので、⑦心に残ったことや質問等、何でも宜しいですから、線を引いたり、丸をつけたりにして記憶に留めていてください。⑧それではさんからどうぞ」と言って、輪読を開始する。

輪読が終わったら、終わった次の人から順番でコメントをしていただく。その前に瞑想の時間を持つのも良い。

「◎それでは、さんから順番で、何でも宜しいですから、今心に残っていることを、一言仰ってみてください」。

聖霊を大教師とし、各人が御霊の感動によって教えていただいた点を分かち合う時間を持つこととなります。

第一ヨハネ二の二七で使徒ヨハネは、「あなたがたのうちには、キリストからいただいた油がとどまっているので、だれにも教えてもらう必要はない。この油が、すべてのことをあなたがたに教える。それはまことであって、偽りではないから、その油が教えたように、あなたがたは彼のうちにとどまっていなさい」（口語訳）と。

また、主御自身が、十字架直前の遺言的御教えの中で繰り返し、弟子たちに語られました。「しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってつかわされる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、またわたしが話しておいたことを、ことごとく思い起させるであろう」、「わたしには、あなたがたに言うべきことがまだ多くあるが、あなたがたは今ほそれに堪えられない。けれども真理の御霊が来る時には、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれるであろう」（ヨハネ十四の二六、十六の十二、十三、口語訳）と。

このように、聖霊は、主を信じるすべての者たちと共におられて、あらゆる真理へと導いてくださるとの約束です。これに依り頼んで学び、受け

た思いを率直に分かち合うのです。真の教師に依り頼んでの学びが問われております。

それから、もう一つ。口で言い表すことには、大きな力があります。自分の姿が見えてきますし、見せることになります。それは人間の真実な成長に大変役立ちます。

このようにして、しかし無理なく、互いに御霊の影響下で交わりをしてゆく時、霊的成長を高度に図ることができます。グループ・ダイナミックスの良い作用を期待すべきです。

注 もし、目が不自由であったり、或は老齢等で読むのが難しい人がおられる場合には、グループを二手に分けて交互に輪読するようにし、その他大勢の中で疎外感のないように配慮してあげるのが良い。また、聖書がテキストの場合には、異なった訳を交互に輪読し合うとかの工夫をしてみても良い。

また、④のように一節ずつでなくとも良い。長い部分の輪読では、二節とか五節とか或は段落毎でも良い。

2. 発言を恐れる人を励ます。しかし無理をしない

「①何でも宜しいですよ」、「②パスしても宜しいですよ」、「③後で何か仰しやうとなったら言ってくださいますか、それで宜しいですか？」等の言葉をういて励ます。

3. 問題発言に對峙しない

目の色を変えたり、こめかみをピクツとさせたりしないで次のように言う。「①中々刺激的な発言ですね。②それでは、後で皆さんの意見を聞いてみましょうね」と。

一般的に言って、問題発言に司会者が直接答えようとすると、司会者と発言者との間に良い信頼関係が欠落している場合は特に、発言者を依怙地にさせる危険があります。しかし同じ仲間同士で反対意見を集約できれば、納得させられる可能性が高いのです。互いに対峙してしまう危険を避けるためには、「では、皆さんの意見を聞いてみましょうね」と、司会者自身の直接的答えを避けることが、しばしば大きな効果を発揮します。

4. 沈黙を長引かせない。

順番が回ってきた時、その発言者が数秒も沈黙したままである場合、その本人は考えているので気づかなくとも、周りの人々は苛立ちを覚える時があります。それを避けるためと、また時間の効率や、本人の発言の機会を与える意味でも、次のように言ってみる。

「①それでは、考えてくださいね。②後で回ってくるように致しますから。③宜しいですか？」うなずかれたら、「④では次の方」と言っ
て回す。

5. あくまでも優しく・楽しく、各位の益を図る

「①大丈夫ですよ」とか、「②心配しないでいいですよ」等と言いな
がら、躊躇している人を支え励ます。司会者の、主にある謙遜、親切、礼
節、柔和さ、同情心が基本的に大事で、その雰囲気で包みつつ、皆が一時
を過ごせるように図るのです。

6. テキストから脱線しないで学べるように図る

時折、軌道修正が必要な時があります。話が脱線して盛り上がりを見せ
る時、数分は、その成り行きに任せながら推移を見守りつつ楽しむことは
大事ですが、テキストに帰ることによって、より学びを共有できるように
し、テキストに集中することによって、より深く主の御声に傾聴し得るよ
うに図るのです。

「①話をテキストに戻してみましようか。この時間は、できるだけテキ
ストからの学びに集中してみたいのですが、いかがでしょうか？」

7. 必ずしも権威者の発言をもつて答えとはしない

一般的に言って、大概は、権威者の発言があれば、その時点で、他の
人々の発言は出てこなくなり、そこで結語的になります。それはそれなり
に大事なことと思います。しかし、しばしば、権威者以外の人々の発言が
意外に新鮮で、また新しい側面を見せてくれることがあるのです。した
がって、権威者の発言も順番の中でお話しいただくようにお願いしてお
くか、一番最後にご発言いただくように配慮するのが良い。最初に発言いた

だくと良い発言が消えるのです。

しかし、しかるべき有能な権威者には場をお譲りして傾聴するのが、互
いを益し、また基本的な礼儀でもありましよう。

しかしまた、もしそれが可能であり、また許されると考えられる場合に
は、予め次のような言葉で了解をいただいておりますことが大事です。

「①順番でお話しいただくようにしておりますが、宜しくお願い致しま
す」とか、「②とりあえず皆さんのご意見をお聞きし、最後に、先生の
お話をお願いしたいと思います、宜しいでしょうか？」

8. 自分の発言を抑える

司会者は、原則として教師のように教える人ではありません。したがっ
て、司会者は、原則として、各発言者へのコメントを控えるようにすべ
きです。しばしば、この司会者のコメント的な発言、或は答えが興ざめを
与えてしまします。

しかし、確かに司会者は教師ではなく、教える必要もないし、むしろ教
えようとしてはならない立場ではあるのですが、司会者としてその場に臨
むにあたり、そこでのテキストから自分が霊的に受けている感動が大き
ければ大きいほど、そのグループは盛り上がり、益されることを覚えておく
必要があります。

9. 司会者自身も互いから学ぶ

司会者はグループの一員として、自分も互いから学ぶ一人であると自覚
していることが大切です。したがって、司会者も順番が来たら、その折に
自分の発言をするのです。

ですから、発言者の発言は、司会者に向かつてではなく皆に語るのであ
り、司会者も教えるのではなく、皆に向かつて一発言を為すという形
です。

10. 時間に敏感

時間の管理と約束時間の厳守を心がけることは、集会を長続きさせる大
事な要素の一つです。

しばしば、横道にそれる発言、或は話好きの長話、また自分の長い体験話等、時間を使ってしまう長い発言に当面します。それが予想される場合には特に、発言をいただく前に、予め次のように言っておくのが良い。

「①皆さんすべてにご発言の機会を持てるようにしたいので、ご発言はできるだけ『一言』で一分以内をお願い致します」とか、「②ご発言は、どんなに長くても三分、三分が来ましたら打ち切りますので宜しくお願い致します」とか、「③皆でワンポイントで話す訓練もして参りたいと思いますので宜しくお願い致します」等。

約束の時間が来ましたら、できるだけ時間厳守で、「④時間が参りましたのでこの辺で、讃美歌一番を賛美し、皆さんにお祈りをしたいのでこの集会を閉じることに致します」。

三、小グループ伝道委員会報告から

今から二十年程前の一九九〇年三月六日に教団本部会議室にて、筆者もその委員の一人として出席し、標記の委員会が数時間かけて持たれました。

その報告の中では、「現状を打開するために、私たちは聖書の伝道法に戻らなければならないのか。その伝道法とは何か。それは小グループ伝道法である」と謳っていました。

そして、小グループ伝道の聖書の根拠、過去または現在の小グループ伝道の成功例、エレン・G・ホワイトのサポート、小グループ伝道の具体的やり方、更に信徒リーダー（小グループの責任者、司会者、教師）の訓練についての提言等が指摘されており、最後に何点かの発言もまとめられた報告書です。

特に、「その他の発言」としてまとめられた十六項目が、今も変わらず参考になる意見であると考え、ここにそれをコピーして紹介しておきます。

1. 小グループ伝道は日本でも成功する可能性がある。キリスト教以外でもこの種の伝道方法（例、法座）がとられているからである。

2. 帰納法的聖書研究は牧師のようなプロでなくとも信徒でも喜んでできる。そして何年でも続けられる。
3. 教理だけでは人を生かすことはできない。キリストとの出会いがあつてはじめて人は生きるのだ。
4. 信徒リーダーが育つのに三〜五年かかる。牧師は模範をもってリーダーを養成する責任がある。
5. やる気のある人たちから始めれば良い。必ずしも、長老や主要な役員でなくても良い。女性でも良い。
6. 日本では帰納法的聖書研究と演繹法的研究とどちらがいいだろうか。検討する必要がある。
7. プロの伝道者を養成するのに二十〜三十年かかる。しかし、小グループ法を用いれば、やる気のある信徒は、一年訓練を受ければできる。難しい伝道方法を用いては、信徒の伝道者は育たない。
8. 日本の伝道を変革するには、牧師の意識改革がまず必要である。信徒リーダーが続々と生まれて小グループ伝道が盛んになるよう、信徒を育成すべきである。
9. 「千人隊長」的なリーダーが今まで欠けていた。「五十人隊長」「百人隊長」の者なら今までのいた。人の話を聞くことができる人が欠けていた。
10. 牧師は語る、信徒は聞く、このスタイルが日本の伝道をダメにしまった。安息日学校クラスも小グループ・スタイルに変えることが大切。
11. 韓国では信徒リーダー・セミナーを五日間ばっちり開いている。牧師も出席。
12. 伝道（小グループ・リーダー）の賜物を持っている人が全体の十〜十五パーセントいる。これらの人たちを育成すれば良い。
13. 一つの教会に三つの小グループができて、各グループで一人の救霊があれば、全体（百）では三百人の救霊になる。一年に千人の救霊は決して夢ではない。牧師だけによる救霊能力には限界がある。
14. 小グループ伝道の鍵は「主にある交わり」である。グループ・ダイナミックスが大切。

15 牧師は救霊のノルマがあつて、信徒のリーダー育成に関して、その重要性を知りながらも、それができなかったのではないか。教団あげて発想の転換をして、小グループ伝道に取り組む必要があるのではないか。

16 牧師のワーカーズ・レポートの報告事項に問題がありはしないか。牧師がした聖書研究、訪問、説教数を記入する報告形式では、信徒のリーダーはなかなか育たない。信徒育成のプログラム等も記入できる箇所がほしい。

(委員会出席者・金城健祐「長」、横溝幸雄、白石尚、我妻清三、小島英伯、関久男、折原盛、福島正博)

小グループ・神からの組織形態
弟子化・リーダー育成・伝道進展の可能性の熱い夢について

発行：2010年12月1日

著者：我妻清三

制作：セブンスデー・アドベンチスト教団牧師会



